論文内容要旨

題目  Negative and positive self-thoughts predict subjective quality of life in people with schizophrenia

（統合失調症患者において否定的、肯定的自己認知は主観的QOLを予測する）

著者  Tomoya Takeda, Masahito Nakataki, Masashi Ohta, Sayo Hamatani, Kanae Matsuura, Reona Yoshida, Naomi Kameoka, Takeo Tominaga, Hidehiro Umehara, Makoto Kinoshita, Shinya Watanabe, Shusuke Numata, Satsuki Sumitani, Tetsuro Ohmori

平成31年Neuropsychiatric Disease and Treatment 第15巻293ページから301ページに発表済み

内容要旨

【背景・目的】
統合失調症の治療目標は“症状の寛解”から自らの人生をより良く歩む“リカバリ”へ変化している。リカバリ達成のためにQuality of life（QOL）の改善が望まれる。QOLは就労や社会的機能を含む客観的QOL、人生の満足度を含む主観的QOLに分類される。近年、統合失調症患者のQOLに関連する要因としてDefeatist performance belief（DPB）が注目されている（Grantら, 2010）。DPBは自己のperformanceに対する過度の否定的認知である。さらに、統合失調症の社会的機能の改善に肯定的自己認知が関連することも示されている（Chungら, 2013）。一方で、否定的、肯定的自己認知が、客観的、主観的QOLとどのような関連を持つかは明らかではない。そこで申請者らは、否定的、肯定的自己認知と客観的、主観的QOLの関連を検討した。

【方法】
対象は36名の統合失調症患者と健常対照者37名である。客観的QOLはQuality of Life Scale（QLS）、主観的QOLはSchizophrenia Quality of Life Scale（SQLS）、自己に関する否定的認知や自動思考と肯定的自動思考はDefeatist performance belief scale（DPS）とAutomatic thought questionnaire-revised（ATQ-R）、陽性症状、陰性症状はPositive and Negative Syndrome Scale（PANSS）、抑うつ症状はCalgary Depression Scale for Schizophrenia（CDSS）、抗精神病薬による副作用はDrug Induced
様式(8)

Extra-Pyramidal Symptoms Scale (DIEPSS)、神経認知機能は Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia (BACS) を用いて測定した。2 群間比較には、t-検定とマンホイットニーの U 検定を実施した。統合失調症群における客観的、主観的 QOL と自己認知と臨床要因との関連を検討するため、ピアソンの積率相関係数そしてスピアマンの順位相関係数を算出した。そして、客観的 QOL、主観的 QOL を目的変数、それぞれと有意な相関を示した要因を説明変数とした一般化線形モデルによる解析を実施した。

【結果】
1) 統合失調症群は健常対照群と比較して、DPB や否定的自動思考の得点が有意に高いことが明らかになった (p < 0.01)。
2) 統合失調症群において、QLS の一般的所持品と活動は BACS の composite score、合計得点は副作用、QLS の動機/意欲は肯定的自動思考、心理社会関係は否定的自動思考と抑うつ症状、症状/副作用は否定的自動思考によって有意に予測されることが示された。

【考察】
統合失調症患者が健常対照者より、DPB や否定的自動思考が高いという結果は先行研究と一致している (Campellone ら, 2016; Hill ら, 1989)。さらに、客観的 QOL に神経認知機能や副作用が関連するという結果は先行研究と矛盾しない (Yamauchi ら, 2008; Ueoka ら, 2013; Gardsjord ら, 2016)。一方で、主観的 QOL で測定される孤立感、副作用による睡眠リズムの乱れや気分の落ち込みに否定的自動思考、活動への意欲への肯定的自動思考が関連しているということは初めての報告である。これらの結果から、客観的、主観的 QOL の改善のためには、副作用に配慮した薬物療法とともに、神経認知リハビリテーションや自己認知への介入を目指した認知行動療法など心理社会的治療法の組み合わせが重要であると示唆された。
論文審査の結果の要旨

報告番号 | 甲医第号 | 氏名 | 武田知也
--- | --- | --- | ---
審査委員 | 主査 福井清 | 副査 勝井宏義 | 副査 西村明儒

題目

Negative and positive self-thoughts predict subjective quality of life in people with schizophrenia

（統合失調症患者において否定的、肯定的自己認知は主観的QOLを予測する）

著者

Tomoya Takeda, Masahito Nakataki, Masashi Ohta, Sayo Hamatani, Kanae Matsuura, Reona Yoshida, Naomi Kameoka, Takeo Tominaga, Hidehiro Umehara, Makoto Kinoshita, Shinya Watanabe, Shusuke Numata, Satsuki Sumitani, Tetsuro Ohmori

平成31年Neuropsychiatric Disease and Treatment第15巻293ページから301ページに発表済み

（主任教授 大森哲郎）

要旨

統合失調症の治療は、患者の就労・社会機能に注目した客観的quality of life (QOL)に限らず、生活満足度に注目した主観的QOLも改善させることが重要である。いくつかの精神疾患の治療において、認知モデルを基盤とした認知療法の効果が実証されている。このモデルでは自己認知が感情や行動を規定するとされるが、統合失調症患者の自己認知がそのQOLに与える影響は十分に解明されていない。申請者らは、自己に関する否定的・肯定的認知が客観的および主観的QOLに影響するという仮説を立て、その関連を検討した。

統合失調症患者36名と健常者37名に対して、客観的QOLは
Quality of Life Scale、主観的QOLはSchizophrenia Quality of Life Scale、自己に関する否定的認知はDefeatist Performance Belief Scale、否定的・肯定的自動思考はAutomatic Thought Questionnaire-Revised、陽性症状および陰性症状はPositive and Negative Syndrome Scale、うつ症状はCalgary Depression Scale for Schizophrenia、抗精神薬による副作用はDrug Induced Extra-Pyramidal Symptoms Scale、神経認知機能はBrief Assessment of Cognition in Schizophreniaを用いて評価した。

臨床要因の2群間比較を行った後、相関解析を用いて患者群における両QOLと自己認知、臨床要因との関連を検討した。さらに、両QOLを目的変数として、それぞれと有意な相関を示した要因を説明変数とした一般化線形モデルを用いて多因子の影響を検討した。

その結果、統合失調症患者は健常者と比較して有意に自己に関する否定的認知や否定的自動思考が高いことが示された。さらに、否定的・肯定的自動思考、主観的QOLとのみ関連することが明らかとなった。以上の結果は、主観的QOLの改善には自己認知の変化が重要となる可能性を示唆している。

本研究は、統合失調症患者の主観的QOLへ影響する要因を明確化し、統合失調症治療に新たな視点を与える所見であり、その学術的および臨床的意義は高く、学位授与に値すると判定した。